

第 178 回九州大学眼科研究会 抄録

1. 治療に難渋した眼窩脂肪肉腫の 1 例 (福嶋正俊)

【緒言】脂肪肉腫は脂肪細胞への分化を持つ悪性腫瘍で、眼窩内発生は稀である。【症例】52 歳から前医で 5 回の腫瘍摘出術と放射線化学療法を施行。64 歳時再発し、当科初診。生検で脂肪肉腫（高分化型）と診断し腫瘍を摘出。73 歳時と 74 歳時にも再発し、眼窩内容除去施行。病理で脂肪肉腫（脱分化型）の診断であり術後放射線療法を施行した。【結論】脂肪肉腫は再発が多く、長期経過で悪性度が高くなる場合もある。

2. 九州大学病院における線維柱帯切開術眼外法と眼内法の治療成績比較 (西田 崇)

【目的】当院で行った線維柱帯切開術眼外法およびマイクロフックを用いた線維柱帯切開術眼内法の術後成績を比較検討した。

【方法】九州大学病院で線維柱帯切開術を行い、術後 1 年以上経過フォロー可能であった 83 人 83 眼を対象とし後ろ向きに検討した。術後 6、12、18、24 ヶ月における眼圧、眼圧下降率、点眼数、視力を評価項目とした。また術後合併症の有無についても検討した。

【結果】眼外法は 54 例、眼内法は 29 例であった。術後 6 ヶ月時点では眼内法を行った症例において有意に眼圧が低く、緑内障点眼数も少なかった ($p=0.03$, $p=0.04$)。術後 12 ヶ月以降ではいずれの項目も有意な差は認めなかった。術後合併症は眼外法で有意に前房出血が多かった ($p<0.001$)。

【結論】当院で施行した線維柱帯切開術では眼外法・眼内法で術後長期の成績に有意な差は認めなかった。眼外法では術後の前房出血に注意を要する。

3. 線維柱帯切開術 (眼内法) 後に低眼圧黄斑症を生じた 1 例 (初瀬健太)

【目的】マイクロフックを用いた線維柱帯切開術 (眼内法) 後に低眼圧黄斑症を生じた症例について報告する。【症例】77 歳女性。2008 年、両眼正常眼圧緑内障と診断し点眼加療開始。2019 年 10 月、緑内障進行に伴い両眼白内障手術併施線維柱帯切開術 (眼内法) を施行。術後、右眼 8mmHg 前後、左眼 15mmHg 前後で推移、右眼に黄斑皺襞出現、右視力低下あり、低眼圧黄斑症と診断し、アトロピン点眼開始。2020 年 10 月、九州大学病院で右眼毛様体解離と診断、同年 11 月、右眼毛様体縫合術を施行した。術後右眼圧は 10 mm Hg 前半へ改善し、黄斑皺襞、毛様体解離は消失した。【結論】線維柱帯切開術 (眼内法) 後に低眼圧黄斑症を生

じる可能性がある。

4. コロナ流行期における涙道診療の実践（鈴木 亨）

2019年12月に武漢で経鼻手術を受けた一人の患者から14名のコロナ院内感染が生じた1)。その事例から、鼻粘膜と交通する手技の感染拡大リスクが危惧されている。これを受けて涙道外科分野では、涙道診療指針が示されている2)。当院では職員を感染から守るため、これを順守した涙道診療を実践している。結果や問題点を報告する。

1) Wende Zhu, Xiaobing Jiang, et al: A COVID-19 Patient Who Underwent Endonasal Endoscopic Pituitary Adenoma Resection: A Case Report. Neurosurgery. 1-7, 2020

2) Ali MJ: COVID-19 pandemic and lacrimal practice: Multipronged resumption strategies and getting back on our feet. IJO. Vol 68 (7), July 2020

5. ブロルシズマブ硝子体内注射により眼内炎症を生じた4例（橋本佳典）

久留米大学病院眼科にて加齢黄斑変性に対してブロルシズマブ硝子体内注射を施行した19例21眼のうち4例4眼で眼内炎症を認めた。眼内炎症で受診時、3眼で視力低下を認め、1眼は不変であった。全例でステロイドの点眼やテノン嚢下注射の治療を行い、網膜血管閉塞の合併は認めなかった。このうち2例は初回投与から6か月以上経過してからの発症であった。導入期だけでなく維持期においても継続して眼内炎症に注意する必要がある。

6. SS-OCT付き超広角走査型レーザー顕眼鏡を用いた裂孔原性網膜剥離の観察

（前原

裕亮）

SS-OCT付き超広角走査型レーザー顕眼鏡（シルバーストーン）は従来の機器では観察できなかった眼底周辺部の断層画像の撮像が可能である。シルバーストーンを用いて裂孔原性網膜剥離の4例を観察し、術前の網膜下索、周辺部網膜における増殖組織、強膜内陥術後のバックル上における網膜裂孔や網脈絡膜の性状が観察可能であった。網膜剥離術前後の周辺部網脈絡膜形態の観察は治療方針決定や、手術手技へのフィードバックにつながる事が期待される。

7. 硝子体手術におけるガスタンポナーデによる術後屈折誤差への影響 (福田洋輔)

【抄録】硝子体白内障同時手術におけるガスタンポナーデによる術後眼内レンズ屈折誤差への影響を、2019年4月から2020年3月の間に九州大学病院で初回硝子体白内障同時手術を施行した連続163眼で検討した。術後屈折誤差はタンポナーデを行わなかった群で $-0.26D \pm 0.28D$ 、空気、ガス注入群でそれぞれ $-0.56D \pm 0.83D$, $-0.80D \pm 0.84D$ であり、有意にガスタンポナーデ群で大きかった($P < 0.01$, t 検定)。眼内レンズ挿入眼ではガスタンポナーデにより術後屈折誤差が生じることが示唆された。

8. 黄斑部に輪状自発過蛍光を併発した色素性傍静網脈絡膜萎縮症(PPRCA)の1家系 (奥一真)

【抄録】緒言：PPRCAは両眼に網膜静脈周囲に色素沈着と網脈絡膜萎縮をきたし、通常黄斑部障害は認めない。原因不明の稀な疾患で孤発例が多く、5件家族例が報告されている。症例：症例1は35歳男性。症例2~4は症例1の男児(13歳、8歳)。全例自覚症状なく、両眼網膜静脈に沿った地図状色素異常を認めた。FAFで色素変性部と黄斑部周囲に輪状の過蛍光を認めた。OCTで黄斑過蛍光部に一致して外顆粒層の菲薄化とEZの消失を認めた。結論：常染色体優性遺伝と考えられる1家系を経験した。既報と異なり黄斑部の輪状過蛍光を認めた。

9. 遺伝子解析を行った結膜寄生の東洋眼虫症の2例 (石部智也)

東洋眼虫が寄生した2症例の虫体の遺伝子解析の結果を報告する。症例1は78歳男性、眼脂を主訴に受診した。症例2は80歳男性、入院中に偶然結膜嚢に虫体を発見した。虫体を摘出し、光学顕微鏡で東洋眼虫と同定、それぞれの虫体についてmtDNAのcox1遺伝子塩基配列を解析すると既報の東洋眼虫ハプロタイプ10と一致した。近年、東洋眼虫症は九州以外からの報告も多く、遺伝子解析は起源、感染の拡大経路を調べるうえで重要な所見である。

10. 春季カタルの臨床所見から解析したクラスターの特徴 (安武朋寛)

春季カタル(VKC)は重症度や治療経過はさまざまだが、病型分類はあまり注目されてこなかった。今回 VKC 症例の臨床像のクラスター分析の結果から各群の特徴づけの可能性について検討した。当科で VKC と診断し、1 年間以上経過観察できた 34 症例を対象とした。初診時年齢、治療期間、治療開始時重症度、最終重症度、トリアムシノロン(tA)眼瞼皮下注射頻度、アトピー性皮膚炎(AD)重症度を分析変数とし、4 つのクラスターに分類した。

11. Soemmering' s ring 脱臼により視力低下を来した人工無水晶体眼の 1 例

(吉富

景子)

【抄録】Soemmering' ring とは白内障術後に水晶体上皮細胞が赤道部水晶体嚢で増殖し、呈した輪状の組織塊である。今回、35 年前に手術をうけた人工無水晶体眼において Soemmering' ring 脱臼を複数回起こし手術を要した症例を経験したので報告する。

12. BRAF 遺伝子変異陽性大腸癌に対する分子標的薬治療に合併した漿液性網膜剥離の 1 例 (村田千博)

【抄録】緒言：切除不能大腸癌に対する推奨治療の一つである MEK 阻害薬は、約 20%に漿液性網膜剥離(SRD)を合併する。症例：51 歳女性。MEK 阻害薬開始後、両眼の黄視症を自覚し当科紹介。Vd=1.2, Vs=1.5 だが、OCT で両眼に SRD を認めた。腫瘍内科に休薬を依頼し、1 週間で SRD と黄視症は消退した。蛍光眼底造影検査では漏出点は認めず、MEK 阻害薬の発生機序について検討を行った。

教育講演

「大分大学に赴任して 12 年、緑内障研究の足跡とこれから」

大分大学医学部 眼科学教室 久保田 敏昭 教授

2009 年に大分大学に赴任した。現在の教室を紹介する。緑内障研究については、私が興味を持っていることを中心に話をする。進行期の緑内障眼にはトラベキュlectミーが必要になり、その成績も大事な情報である。近年は低侵襲緑内障手術が広く行われ始めている。

また選択的レーザー線維柱帯形成術と点眼治療のどちらをファーストチョイスとするかの議論もされている。緑内障治療を考えるうえで、隅角所見を正しくとり、緑内障眼で線維柱帯にどのような病理変化が起こっているかを理解することは重要である。血管新生緑内障、落屑緑内障、サイトメガロウイルス虹彩炎で観察される病理変化を概説するとともに最近の知見を紹介する。久山町研究で行った緑内障検診の結果も述べたい。